



保存科学分野での研究は、実際に遺物のサビを取ったり、壊れた部分を復元するなどの処理段階に、遺物を顕微鏡で細かく観察するので、遺物の製作過程で残る痕跡などを確認することが可能である。そのため、他の研究分野に比べて製作技法に関する研究では非常に有利な分野である。象嵌研究においても、製作技法に関する研究は、主に象嵌処理者らの個別的な遺物の処理報告を中心に考察されている。

現在までの韓国と日本の古代象嵌技法の研究成果によると、鉄地にタガネで断面三角形の溝を彫り、その溝の中に、金や銀、銅線を金槌で叩きながら嵌める線象嵌が主に使用されたことが明らかになっている。しかし、古代の象嵌技法を線象嵌でまとめてしまったため、4世紀から7世紀まで、即ち、平象嵌が発生するまでに、象嵌技法における技術的变化はないことになる。また、工人や工房の差により製作過程に応じる変化などが感知されていない。そのため、製作地や製作工人による研究は、主に象嵌された文様を中心に行われている。彫った溝に金属線を嵌めてしまうと、製作過程を予想するのは難しいが、製作過程の技法により応じる差は、ただ製作した工人の差や工房の差を現すだけではなく、その技術が伝来されたルーツや、その技術を受け入れた側の、文化収容における文化的一面を現す重要な手がかりになる。

特に、5世紀代の日本で見える、技術革新ともいえる金工製品は、その製作地が半島であるか、または日本在地で製作したものか、或いは、日本で製作したとしても、渡来人の工人が製作したものなのか、渡来人の影響を受けた日本在地の工人が製作したかなどが、金工品研究での一つのテーマでもある。製作技法の研究は、5・6世紀における技術移転研究の手がかりにもなる。

ここで、筆者は、象嵌の製作過程に起こる技法の差を感知する一つの方法として、製作過程を諸要素に分類した。製作段階の分類は、まず象嵌遺物の観察と金工製作に関する共伴遺物、工房遺跡の例を中心に、そして、

出土遺物や遺跡から推定できない部分は、文献記録と無形文化財工人の製作記録、伝統工芸研究論文を参考に行った。

分類した段階は、象嵌する文様を決めるなどの企画、タガネなど道具や象嵌する材料の製作、地金の彫り方、嵌め方、仕上げに分けて、その内、出土象嵌遺物から確認できる差は、象嵌溝の彫り方と象嵌線の製作方法が予想された。彫り方は、5世紀代の金工遺物から確認できる蹴り彫りと毛彫りに、象嵌線のつくりには、鍛造で製作したものと、線引で作ったもの、そして、叩いて板状にした後、切り、手で捻ったものと、棒に巻いたものの四つに分けてパターンを設定して製作実験を行った。

次に、製作実験の結果を土台にして、出土象嵌遺物を観察した。その結果、彫り方では、蹴り彫りと毛彫りの両方が確認できた。しかし、同じ時期の金銅製品で見れる蹴り彫りから毛彫りに変わる変化が、象嵌彫りの場合には、蹴り彫りが先登し、毛彫りで彫られた遺物は、韓国朝鮮時代のものである巖美術嵌所蔵の鏡掛け台、日本出土平群町梨本2号出土太刀、佐野市出土太刀で7世紀以降のものである。象嵌線の製作技法では、鍛造で製作された針金と共に板を切って巻いた線が象嵌線として使われている。日本で確認できる例は、6世紀後半以降のものだが、韓国では5世紀中半の感安道項里馬甲塚出土太刀から確認できた。既に嵌められた象嵌線の場合、巻いた線であることを確認することは非常に難しいだけで、その例は増えてくと予想される。針金の製作に引板の使用がどの時点であるかは、金工の技術段階を示し、非常に興味深い話であるが、引板を使った針金の製作は、早くても6世紀までは行われていなかったと思われる。

しかし、ここで示した製作技法の分類は、実体顕微鏡などを利用するなど、非常に細かい観察から確認できるもので、分類可能な遺物の例が少なく、製作地や工人集団が分別できるまでの分類は行われなかった。肉眼で確認可能な部分は非常に少ないため、遺物の保存処理過程での観察が望ましい。

さて、肉眼で観察可能な方法として、象嵌線の幅と象嵌が行われた場所、文様により象嵌遺物を分類し、段階を設定した。編年は、共伴土器を中心にしたもの、4世紀から6世紀まで韓国と日本で出土している象嵌太刀では、被葬者の身分を現す威儀具の一つである太刀の装飾に使われた象嵌技法は、副葬される墳墓の規模や共伴遺物からみて時期による変化が確認される。

先ず、墳墓の規模と共伴遺物から象嵌太刀が副葬されていない墳墓より優勢が認定できない段階である。しかし、5世紀に入ってから、象嵌太刀を含む装飾太刀と装飾がない太刀の墳墓の間に明かな差が認定できる。5世紀前半までは最首長層の墳墓に採用された象嵌技法は、押出や金銅張りの龍文装飾太刀の装飾の一部として使われたり、一段階下級の墳墓に持たされる。

6世紀初めの段階まで愛用された象嵌技法は、韓国では6世紀後半になると、急に発見例が少なくなる。それは、半島内の情勢の変化に伴うできごとである。5世紀に入ってから前期加耶の中心地であった金官加耶が衰退するに連れ、百済との関係から成長し、後期加耶連盟の中心であった大加耶は、百済により象嵌技法を取り入れ、加耶の各地に配布しながら連盟の中心位置を固める。しかし、562年、新羅により大加耶は滅亡、ある程度の安定した権力に基付いて編成、維持される金工工房は、大加耶の滅亡と共に分解され、象嵌製品が激減する。それと同時に日本では象嵌製品が増加する。

日本で出土している象嵌遺物は、漢中平紀年太刀や七支刀の例でもわかるよう、中国の漢や百済からのルーツが想定できるが、それ以外の3、4世紀代の象嵌遺物の出土例はなく、5世紀代や6世紀始めに見られる少数の環頭太刀の例からみると、実際に象嵌技術が伝わったのは加耶地域を通したものではないかと考えられる。

ここで、桂城明里出土太刀の例をみると、大加耶製作象嵌の系譜を引く

ものとして、また、出土した太刀の副葬位置からみても、在地系の性格が強い人物のものとして推定できる。明里出土太刀は、非常に精緻な文様の太刀で、大加耶の工房がそのまま存続していた可能性が高いことを意味している。

整理してみると、加耶は大加耶を中心に百済により象嵌技術を受けついであつた。新羅で象嵌技法が使用されたものは、加耶に影響力を発揮する時点からである。しかし、百済に伝わった象嵌技術のルーツについては、中国南朝説と高句麗説がある。しかし、文様による系譜の研究では伝播ルーツを区別することは難しい。

今回、筆者は、象嵌技術においての伝来ルーツや在地系を設定する一つの可能性として、彫り形や針金の製作など、象嵌製作の全過程を、製作実験を通して想定し、製作実験の結果から得た資料と比較しながら分類を行った。製作過程の技法の差は、技術の伝来と密接な関連があり、技術を受け入れる側の文化的な性格を反映することから、文化の一面を現す重要な手がかりになる。

このような、製作痕跡の観察は、個人の研究者として観察する事は難しい。製作痕などは、観察象嵌遺物の保存処理段階が最も容易であるため、また今後の象嵌遺物の保存処理での新しい情報を得ることが望まれる。

そして、今回は触れていなかったが、金や銀の材質の成分比も技術的な分類の一つとして考えられる。金や銀に含まれる微量成分を明確にすることにより、地域性や時期の分類をすることができると考えられる。今後の課題として考えておきたい。